

## こころ・やわらぐ・美の教育

福田好孝  
十河幸喜

### はじめに

「子どもたちをここに連れてくる…」児童・生徒の作品を分科会会場に持つて来ることの意義。重みのある言葉である。

作品の交流を通して、教師自らが辿った過程を検証する。そこは、子どもたちを取り巻く背景をも見抜く力を養う、指導者の確かな眼も育む場でもある。作品を創らせる・描かせるにあたっての、明確な狙いや心を射抜く眼差しがなければ、実践の背景を探ることはできないであろう。発達を保障する教科・科目ゆえに必須である。指導者の責任は重い。

討議は五つの柱に沿い、今日に至る一年間を振り返る。美術教育が置かれている現実を検証しつつ、その子ども、

その集団、地域事情に即した真摯な取り組みがそこにある。

### 研究課題（五つの柱）

- 一、子どもたちを取り巻く様々な状況・実態を明らかにする
- 二、美術教育によってどのような力を育てていくのかを現場の実践を通して研究を深める
- 三、子どもたちが楽しく主体的に授業に取り組み、制作や鑑賞を通じて自己の感性を高め、作品が完成したときに心から感動を味わうことができる授業について研究する
- 四、美術教育の時数減に対して、現場での対応を交流し、造形教育による教育効果を高める研究を推進する
- 五、美術が心身ともに健全な児童生徒を育成するために不可欠な科目であることを作品制作や鑑賞の指導を通じて明らかにしていく

保育園から小学校、中学校そして高等学校まで、子どもの成長に沿った現場での実践交流がなされた。参加者数は12名、レポート数は10本であった。

## 実践報告

卒園記念制作・木版画 「みんなとおふろ」

深川市 多度志保育園



「この分科会に作品を持ってきているのではない」「ここには子どもたちを連れてきているのだ」との齋藤恵氏(齋藤氏は、多度志保育園・巨大木版画制作の協力者である)の言葉は、大変衝撃的であった。子どもたちが卒園に向けて約4カ月かけて取り組んだ木版画制作の足跡・制作過程を、同じ目線で、温かい視線で見守ってきたからこそ言葉であろう。美術教育で大切にしなければならぬ教える側のあるべき姿勢を改めて示唆された。たった3人の保育園児が制作した木版画は、タテ182センチ×ヨコ273センチ(ベニヤ板3枚分)もある巨大木版画である。齋藤氏は、毎年、この分科会に

幼児が制作した大作を抱えて参加している。

この実践は、この保育園で二十数年の長きにわたって続いている。重なる表現などから「子どもの作品ではない」との批判を受けたこともあるというが、そのような批判さえはね返すような圧倒的な存在感のある作品となっている。作品のテーマは、子どもたちの保育園での生活である。さまざまな貴重な体験で得られた思い出は、子どもたちの中で確実に生き続けているのである。

図版を見て欲しい。画面左側上部から右側下部にリズムカルに流れるような動きを感じ取ることができる。白・黒の色の響き合いも素晴らしい。子どもたちの生き生きとした表現を誰も否定できない。

保育園児たちは、この巨大木版画を「ホントの版画」と話しているという。本物を確実に見抜いているのである。

「デザインを卒業式の装飾に生かす!!」

江差町立南が丘小学校 森 博則

二〇一一年の合同教育研究会・美術教育分科会会場には、巨大な作品が2点展示された。一つは、前述の多度志保育園の巨大木版画。そして、江差南が丘小学校の卒業式ステージを飾った幾何学模様の巨大デザイン作品である。分科会会場の左右の壁面を巨大作品が飾ったことが今まで



あつただろうか。おおげさかもしれないが歴史的な瞬間に立ち会えたことはうれし。

さて、6年生16人の共同制作による壮大なデザイン作品制作は、当然、計画性も求められるであろうし、完成までの道のりも長く、困難も多くあつたことと思う。まず、16人が一人ひとりの幾何学模様の図案を考

えることからのスタートである。「遊びながら? 『デザインを楽しむ』のコンセプトのもと、さまざまなアイデアが生まれる。幾何学模様を得意とする子ども作品をよりどころとして、個人の、そして、全体的な作品レベルを高めるように、指導者は、子どもたちをしつかりと観察し続け、工夫させるように努力している。

アイデア完成後は、1人が模造紙4枚に図案を拡大、水彩での着色。子どもたちは、大きな用紙にダイナミックに着色し楽しんだ様子が作品からうかがうことができる。

一人ひとりの作品は、これまた巨大な模造紙の台紙に貼られた。さまざまな幾何学模様作品の仕事が見事に融合し完成した。小学生の取り組みではあるが、レベルの高い美しい作品に仕上がっている。感動のある卒業式を演出できたことであろう。

### 「グラデ&シルエ」

枝幸町立枝幸中学校 小林 清一

「子どもたちに寄り添っている」小林実践はいつもそのように感じる。そこには、子どもたちを大切に見つめている視点がゆるぎなくあるからであろう。



置かれている状況は、決して良いわけではない。しかし、子どもたちの活力、良いところをたくさん見つけようとする姿勢がある。地域保護者と教師集団が力を合わせて教育活動に取り組んでいる学校であるからこそ成果をあげているのであろう。

授業実践は、色面構成である。形態を「シル工」（シルエット）とし、彩色は「グラデ」（グラデーション・明度段階での彩色）と指定、ある程度の制約を設けている。どの作品も美しい仕上がりである。小林実践は、一定レベルの作品に到達させようという狙いの下、周到な準備、指導がされている。子どもたちも一定レベルの作品制作が出来上がることで達成感が得られる。授業中「美術が好きだ」と言われることに幸せを感じるとのことだが、その言葉が自然に出てくるような素晴らしい指導がしっかりと根底にあるからであろうと思う。

レポートには、次のような記載がある。『中学校に上がってくる生徒たちは、「図工」と「美術」を違う教科ととらえている生徒も多いようです。図工は苦手だったけれど、美術は頑張るぞ！そんな声も聞こえてきて、そこに切り込んで、何とかしていこうと考えている日々です。新任のころ大先輩に言われたことがあります。「美術を教える上で、大事なことは、美術を嫌いにさせないことだ」今も胸に残っています』教訓としたい。

美術という教科の可能性を信じ努力を続けなければならぬ。

鑑賞「鑑賞7」<sup>なな</sup> 作者や時代背景に光を当て、

作品の側面をみる鑑賞

美深町立仁宇布小中学校 茶谷 裕樹



「自作ありき」の実践報告。レポートタイトルは「鑑賞」とはなっているが、風景写生やペーシックデザイナー、ドライポイントの報告もなされている。

児童生徒合わせて15名の学校。うち13名が山村留学生。赴任して三年目、主免許である技術の他に、美術と理科の3教科を受け持つ。担当教科が増えたこと

もあり、新たな鑑賞教材までは辿り着けなかったという。しかしながら、鑑賞はそれぞれの年次で行っている。茶谷実践の鑑賞の位置づけは明確で「鑑賞の授業の先には、その鑑賞に少なからず関わりを持てる実技制作へ」つながるのである。その制作に対し、自分がどのように関わったかを記す個人の制作記録簿「作品シート」を作成させる。

更には、仕上がった作品の発表会で「制作シート」も利用しながら相互鑑賞を行なうという。

この三つの段階を1つに繋げるように流れを持たせた実践は、指導者の強い意志と綿密な仕込みがなければ行なえることではない。またこの「自作シート」は新たな制作ごとに活用している。制作を終えることに生徒作品の相互鑑賞会が行なえる、行なう用意がなされているのである。

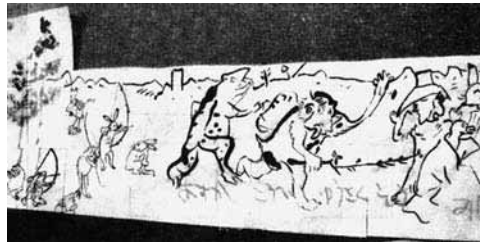
一つの題材にとりくませる準備も周到で、制作案内のほとんどが自作であり、技術に直結するものは手描きに徹している。興味・関心を引き出し次作への制作効果を上げるに至っている。ベースックデザインの導入部分では、程よくコンピュータとも付き合い、最終的には手描きへと導く。バランスを保とうとする丁寧な実践であり、作品づくりでの側面（裏づけ）の大切さを示す報告である。更なる深まりを期待する。



「まだまだ続く…中学2年生、

グループで絵巻物作りへの道」

網走市立第三中学校 成田 悠



一年目二年目とそれぞれ課題を掘り下げ、新たな年次生には解消すべく策を講じる。「この学年には、この迫り方で」といった意識と拘りを持って挑んだ2年生5クラス117名、教師自ら三年目の積み上げ実践でもある。

その学年の実態にも即し新たな取り組みと、甲巻としての在るべき本来性と向き合う。そこには、1枚の絵（一齣）を繋ぎ合わせ、絵巻（動画）とするための仕込みをする。一齣を創るために班分けをする。所謂、分業制を敷くのである。多感な時期ゆえの人間関係も考慮するというが、ワークシートの制作結果から適性を得、背景絵師とキャラクター絵師に分け分業させる。

「人間関係から1枚の絵がでなかつた」という昨年の

反省を活かした方向が、作品主体、制作本位となった。その結果が、最終的に絵巻を創るという目的意識を明確に持たせることにもなったはずである。1枚の絵の練習中に、作品をつなげだすという行為に至ったことがその証明であろう。班自体が齣絵師という分業体のようでもある。目的とする絵を描かせるに当たって、技法や技術を、教えるべきものとして教えたことも、この行為に至ったと言えよう。拘りの実践とは、続くべくして続くものなのである。

### 平面構成「アイヌ文様を使って」

苫小牧市立緑陵中学校 前田 求



アイヌ文様を使つての授業実践が、久しぶりに今分科会に持ち込まれた。ある意味新鮮さを感じる事ができた。指導者が若いということも一因であろうし、子どもたちの作品が明るく斬新である

ることからも新鮮な印象を受けたのかもしれない。指導者自身がアイヌ文化伝承の地、白老町出身であることもこの題材に意欲的に取り組む要因にもなっている。

この題材に取り組むことは、背景に難しい課題も多々あることは、この分科会でも長い時間をかけて十分に論議がなされてきている。教える側がその課題を真摯に研究し、その背景にも触れながら、造形的に美しい文様として教えるべき題材であるという結論に至っていると感じている。

授業実践は、アイヌ文様を使つての平面構成デザインである。アイヌ文様がアイヌの人々の生活でどのように活用されてきているかを子どもたちに伝えることから始まり、文様を対称や並列という、繰り返し使用するという約束事としてあげることから始まる。苦手な子どもには、文様の型紙を用意してあげるなどの技術面での補助も確実にしている。もちろん、アイヌ民族館、民族工芸館の協力も得て指導に役立っている。

『アイヌ文化の中でも、文様装飾は人々の生活に深く関わりを持つて活用されていて、その装飾性の高さには驚かされる。「生活と美の関わり」を身近に感じ触れることを大切に考え、このアイヌ文様を授業で扱うことで、民族工芸の「美」に付いても目を向けさせたいと考えて取り組んでいる』との考えの下、前任校から継続的に取り組んでいるということからもしっかりとした裏打ちがあつての指導である。今後どのように研究、発展させていくかが興味深い。この分科会としても支援していきたい実践である。



「二〇一・毎日の授業実践から」  
岩内高等学校 福田 好孝

「確かな学力は美術教育でつけられる」 福田氏の信念で  
ある。

「経験が少ないので描けない」と嘆くより、その状況に応じて、しっかりと教えること、経験させることが大事」と、目の前のものを描くという実践報告である。今回は「ピン」。じっくり観察できるように、1人に1本のモチーフを渡す。自分の目の前に置ける。当然、同じ大きさで種類



美術体験の入り口に相  
応しいものであるとい  
う、考えを貫くがゆえ  
のこの手立て、逆手の  
発想に至ったと言えよ  
う。

「若い自由な発想力  
に期待した構想画」制

も同じである。いつものように、制作案内「ART・IWA  
NANA」が配られる。このピンの制作に関わっての「A  
RT・IWA NANA」は3枚。最初の1枚は、鉛筆で明暗・  
鉛筆のトーンの美しさを体験させるワークシート。2枚目  
3枚目は制作のヒント、ポイントを示したものである。1  
本のピンを描かせる、描かせ切るに至る福田氏のプロセス  
は、実に丁寧である。昨年の本分科会の反省を活かした結  
果がここにあるのだ。目の前のものを描くという絵画的表  
現は、最も基礎的で重要である。しかし、上手く描かせる  
ことができれば絵が嫌いになってしまうのでは。とい  
う今後の影響を考え敬遠しがちになる。よって、描くため  
に必要な考えが、教える側・教わる側双方至らなくなっ  
てしまう。経験が少なくなるといふ必然。三次元の世界を二  
次元へ表現（造形）させるといふことは、高校生としての

作も行なっている。こだわり続けてきた「系統立てた指導」ではない。だからと言って放りっぱなしにはしない。発想を支援する意味でヒント(規制)を授けつつ手助けもする。表現に広がりをもせる。

描かせることで自らの内面を見つめさせる。自己を獲得させること。美術教育に確固たる信念・魂を感じる福田実践である。

「学ぶ」美術

俱知安高等学校 本庄 隆志



「美術を学ぶとは」を追い求め「教科の存在意義を問う」と走り続けてきた。退職され、時間講師として退職校で継続的に教育現場に関わっておられる。退職以前とは違った視点から美術教育を問われている。レポートタイトルが象徴しているよう。本庄実践の魅力は、なんとと言っても引き出しの多さにある。その時期を逃さず、個に応じた、集団や地域特性、生活年齢に応じたなど、寄り添うような指導法をその引き出しから持ち出

すのだ。

昨年度までとは勝手が違い、例えば、近隣美術館への引率が非常勤講師故に、出来なくなり、当たり前のように行なってきた教育活動に制約がかけられてしまったという。

しかしながら、近くにある美術館は魅力であり、何とか活用すべきとの考えから、美術館の学芸員を学校に招き、美術館鑑賞を行なうにあたっての事前指導を敢行するのである。その授業の後に期間を設け各々、美術館へ行くという課題を課したのである。「授業で連れて行かれる」と「何とか自ら行く」とでは、結果、美術館がより身近になったようである。事後感想「ゆっくりとした雰囲気ですらラックスして作品を鑑賞することができた」にうかがい知ることができる。手法を180度転回したことが双方に新たな方向性を生み出し、本庄実践に深みを増すことにもなったに違いない。

鑑賞の他に、版画「メゾチント」も掘り下げている。今までは、経費の絡みもありアルミ板を使用していたが、銅板に切り替えている。同じ制作工程であっても、刷り上りも然りであるが、版画故の材料から受ける抵抗感の違いは大きい。「本物であるべき」というメッセージが込められているようでもある。

「美術を学ぶ」ということは、作品を通して自己と向きあ



うという人として大切な営みである。その中で培われ、展開される試行錯誤は批判的思考力、創造力を生む土壌となる。美術こそ大切にされなければならない教科である。」  
ご本人のレポートの行である。

「そば屋さんのカレーライス」〜定番物語〜

江差高等学校 十河 幸喜



「確かな目と手、心を育てる美術教育」をテーマとして研究が続けられている檜山合同教育研究会・美術教育分科会を今年も確実に通過しての今分科会参加である。いつもながらこの姿勢には、敬意を表したい。

任地の小学校、中学校と連携をはかり美術教育を高等学校まで継続性のあるも  
のにしたいという考えは確固たるものがある。図工、美術教育が軽んじられていることに警鐘を鳴らし、この教科・科目の存在意義を問い続け、造形教育の普遍性、公教育に

位置づけられている意味を確認し続けることの重要性を問うている。

授業実践は、「カラージュ」から発展させたサインペンによる「点描」作品制作である。カラージュ制作から引き出した要素をトレースさせ、繰り返ししたり、展開させたり、子どもたちの発想は、限りなく広がっていく。さまざまな試行錯誤の後、下図は完成し、それをケント紙に転写、サインペンでの本制作と移っていくのである。子どもたちのさまざまに変化していく様子、疑問や発言などを見逃さず、聞き逃さず、敏感に柔軟にエネルギーにに対応していく。美術教室では「十河劇場」が繰り返られているのだろうと十分に察することができる。授業実践の背景には、美術が子どもたちの心を育てる教科であるという「心の主要教科」であるという自負を持ち、簡単には妥協しないという信念がある。

エネルギーな指導とともに繊細な感覚を持つて子どもたちに接していることも十河実践である。『ARTって言うのは、ヒトと関わる心』しかも真心つてやつ。ARTの頭にHeをつけたらHeartでしょう…』との記載がある。美術は、心を育てる教科である。

## 「単位制高校・美術実践」

釧路江南高等学校 上野 秀実



今分科会には、レポートのみの参加となった。常に授業改善に努め、革新的な取り組みを続ける姿勢には定評がある。レポートの冒頭には、進学重視の単

位制高等学校の問題点、美術教師ゆえの葛藤が記されている。引用させていただく。『授業では学年進捗と共に美大受験志向を強めなくてはならない。進路へのニーズ追従と情操教育としての存在意義を鑑みた授業の組立てで悩むこともあり、私自身が本校での美術教育の在るべき姿を模索中である』との記載がある。誠実な姿勢である。

授業実践を二つ紹介させていた。二つとも2年生での題材である。一つは、「スプーンに映った自画像」である。

（自画像制作は、青年期の自分を見つめさせるためには良い題材ではあるが、難しさもある）自分をスプーンに映して描かせる方法は、制作の視点を変える目的では、面白い題材である。上野実践は、用紙（マーメイドボード）や彩

色段階での工夫（無彩色で彩色後、有彩色で描き加える）がある。

一つは、パラパラ単語帳アニメである。上野実践の真骨頂とも言える。このような課題に取り組む柔軟な発想が素晴らしいと思う。子どもたちの目線を変えて、美術に関心を持たせる工夫は大切である。単語帳という受験生、高校生には身近で手軽な物を用紙として使用することも魅力である。絵コンテ制作が困難かと思うが、高校生らしい自由な世界が広がるのだろう。

上野実践での子どもたちの作品の魅力は、美しさにある。また、完成した作品を子どもたちに大切にさせるさまざまな仕掛け、例えば、作品をインターネットで公開するなど作品を主役にする工夫、手間暇かけての仕事もある。ここにも子どもたちに寄り添い、美術教育を慈しむ良い実践がある。さらなる研究の発展を期待している。

## まとめ

「子どもたちをここに連れてくる」の一言は、この分科会でその都度、確認しあってきた全てをわかりやすく紐解いた。

・発達を保障する教科、科目である



・私たちはこの子どもたちの表現を保障して行く義務があり、そのための研究を絶えず行なわなければならない

い  
・何といつてもこの分科会の宝は、子どもたちが制作した作品が持ち寄られること、等々

研究課題（五つの柱）を生業とし、自らの過去一年を振り返り、確認し合い積み上げる。そして明日からの一年を展望、現場へと向う。毎日が研究となるはずである。しかし図工・美術だけをやっていたらいいというわけでもなく、心を忘れるような現実には押し潰されそうになることもある。まして美術教育を取り巻く状況の厳しさは進行形である。

そんな中にも関わらず、中学校からの参加者が増えたことは何より勇気付けられた。

報告の中で、ある地域では中学校での美術体験が最後になるといふ。地域の高校には美術がないという憂うべき現実がある。「確かな

学力：心の教育：コミュニケーション能力の育成：」国はこれだけのことを要求しているにも関わらず、地域によって心の教育に差をつけることは矛盾であり納得出来ることではない。しかしながら指導者は、「高校では美術はないけど、美術が嫌いにならないで卒業して欲しい。そうなることで、ずっと美術と付き合っていられる：」と15歳で終了させられてしまう子たちに、生涯にわたるエールを送る授業を行なっている。素敵である。

幼児教育、小学校、中学校、高等学校と発達段階に寄り添った教育が確実に、なされるべきなのである。故に我々は、研究を続けるのである。誰に頼まれた訳でもなく。そばには作品となつた子どもたちが、明日を覚えてくれていて。作品と居ることが、当たり前前の美術教育なのである。発見や気づきの無い年はない。得たものは大きい。

（岩内高校・江差高校）